

## 令和2年度第2回県立長野図書館協議会議事要録

### 1 日時

令和3年(2021年)2月4日(木) 午後1時30分～午後4時

### 2 場所

県立長野図書館 会議室

### 3 出席者

<委員(五十音順)>

渡邊 匡一会長 内山 由香里委員(ウェブで参加) 春日 由紀夫委員(ウェブで参加)  
西山 卓郎委員(ウェブで参加) 平賀 研也委員 松山 佳奈子委員  
棟田 聖子委員(ウェブで参加)

<県立長野図書館>

森館長 中村次長兼総務課長 永野企画協力課長 柳沢資料情報課長 河野情報係長  
柳沢主幹 篠田主査 朝倉主査 槌賀主査 西山主任 町田主任 畔上主事 新井主事  
佐藤主事

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

春原企画幹、小澤主査

### 4 会議次第

- (1) 開 会
- (2) 館長あいさつ
- (3) 委員紹介
- (4) 職員紹介
- (5) 会長選任
- (6) 県立長野図書館協議会について
- (7) 会議事項

ア 令和3年度県立長野図書館予算について

イ 電子ブック導入について

ウ 「県立長野図書ミッション・ビジョン」について

エ コロナ対策下のサービス方針について

オ その他

- (8) 閉 会

### 5 会議の概要

#### (1) 館長あいさつ(要旨)

皆さま、本日はお忙しい中ご参集いただき、ありがとうございます。

このように、リアルな場所での「参集」と、オンライン経由での「参集」がミックスされた「場」が日常化して久しくなり、ニューノーマルになったのだと思います。

本日は、新しいメンバーになって初めての会となります。新しく委員をお引き受けくださった方の中には、誰よりもこの図書館についてわかっていらっしゃる方もおられますが、全く初めてという方もいらっしゃると思いますので、適宜ご説明を加えながら進めていきたいと思っております。何か分からないときや意味が通らないときは適宜ご質問いただければと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

## (2) 会長選任

本年1月1日付けで委員が改選されて初めての会議のため、新たに会長の選任が必要となる。

慣例により、委員の皆様の互選で渡邊匡一委員を会長に選任した。

## (3) 令和3年度県立長野図書館予算について

資料により中村次長から説明

## (4) 電子ブック導入について

資料により森館長から説明。説明内容は以下のとおり（委員と職員との間で議論が行われたため、説明内容の要旨も掲載）。

電子ブックの導入で何を狙っているのか、イメージ図を見ながら説明。県内77の自治体のうち、図書館がない町村は21。1/4以上の自治体が、図書館を持っていない。図書館があっても、慢性的な予算不足や、遠いなどの要因で、情報格差が起こっている。資料費の多い少ないにかかわらず、書庫の狭隘化が課題になっている図書館もある。

従来から、図書館同士が相互に本を融通し合ってきたが、それにも限界がある。加えて、コロナ禍においては、そもそも図書館が開けられないという状況が起こり、抜本的に考え直す必要が出てきた。

電子ブックの共同導入が実現すると、一自治体では買えない分も含めて電子ブックが読めるようになるので、不足分を補うことができる。また、電子ブックは収蔵スペースを必要としないので、スペース問題が解消しやすくなる。さらに、紙の本を図書館に行き借りたり、読んだりするのが難しかった人にも、図書館のサービスが届けられる可能性が出てくる。

6月に、高森町で長野県初の電子ブックサービスが始まった。また、前年の東日本台風で被災した図書館から「電子ブックがあれば、ここまで長くサービスを止めずに済んだのでは」というコメントが出された。図書館向けのアンケート結果からも、ニーズが感じられる。

全国的に見ると、2021年1月1日現在、143の自治体で電子ブックサービスが導入されている。表は、都道府県立図書館が導入している県のみ抽出したもので、8館導入済み。各自治体の事情によって、さまざまなパターンがある。

「前回レクの振り返り」にあるように、電子ブックのメリット・効果は認められたものの、市町村との連携による全県的な事業展開、教育現場の実態に応じた事業展開といった課題が示された。教育現場の実態に応じた事業展開というところでは、今回新たに、高校から委員に入っていたので、ご意見を頂きながら検討を進めたい。

## (5) 「県立長野図書館ミッション・ビジョン」について

資料により森館長から説明。説明内容は以下のとおり（委員と職員との間で議論が行われたため説明内容の要旨も掲載）。

前回からの継続審議だが、初めての委員もおられるので、簡単におさらいする。ミッション・ビジョンを策定する目的は、平賀前館長時代の図書館改革の方向性を引き継ぎ、さらに進化・発展させるための「共通言語」として、拠り所になるものを作ることである。四層構造になっており、一番上位の「使命」は、100年単位で将来にわたる普遍的な価値を、県民との約束として表明するもの。「展望」は「使命」を実現するための機能・要件を「資料・情報」「空間・場」「人」の3つの枠組みで示している。三層目に実際に進めていく際の「行動指針」、四層目に具体的な事業計画レベルに落とし込んだ「行動計画」が来る。

前回は、「使命」「展望」「行動指針」を審議していただき、「使命」の一行目、民主的な社会の主役である皆さんが、という部分について、「信州に暮らす」という限定をするかどうか議論になり、ここからは削除することになった。「展望」では、県立長野図書館の第一義的な利用者は長野県民であるということもあり、「信州のどこからでも」と、「信州」を残してある。ただし、いわゆる「関係人口」と呼ばれるステークホルダーや、信州「を」信州「から」知りたい、全ての人と協働するという意味で、「行動指針」では「県内外の人々」と表現している。タイトルは、改革の方向性を体現するキーワードとして、「共知・共創の広場」とした。

今回は、主として4つ目のレイヤーである「行動計画」を中心にご審議いただきたい。概ね、5年程度のスパンで、次期「長野県総合5ヶ年計画」の『しあわせ信州創造プラン3.0』への橋渡しをするところまでを考えている。

「行動計画」は、図に示したとおり、「展望」に掲げた3つの要素である「資料・情報」「空間・場」「人」と、それを下支えする「長野県eLibrary計画」の4つで構成している。「長野県eLibrary計画」とは、「ITの浸透によって、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる」考え方として、長野県でも取り入れられている「デジタルトランスフォーメーション」を、図書館の機能強化に生かすための方策である。

「資料・情報」は、いつでも・だれでも・どこからでも「知る・学ぶ」ための「資料・情報」を、媒体にかかわらず、積極的に収集・保存・活用・発信できる情報基盤を進化させるため、①蔵書（資料・情報）の構築・配置計画の見直し、②「信州ナレッジスクエア」の拡充（いわゆる、デジタルアーカイブ）、③「電子ブック」の導入・拡充の3つの事項を立てた。「蔵書（資料・情報）の構築・配置計画の見直し」は、書庫の改修により、6層目ができることをきっかけに、館内のどこに何を置くか、ということや、どこまで利用者に直接利用していただくか、県立長野図書館は、役割として、どのような資料・情報を収集・保存・提供する必要があるのか、ということ、改めて検討するものである。「展望」の①に掲げた、「全ての人が情報を入力・活用すること」と、「次世代に継承すること」は、場合によっては矛盾してしまう。例えば、長野県固有の郷土資料は、県立図書館の役割として網羅的に2冊ずつ収集している。1冊は保存用、1冊は館内利用です。それを貸し出すかどうか、が、課題になっていた。現時点での結論としては、現状においては、やはり保存を優先せざるを得ない。つまり、貸出をすれば紛失や破損のリスクが増えるので、貸出はできないという考えである。ただし、ここにデジタルトランスフォーメーションの考え方を入れて状況を打破したいと考えている。コロナ禍において、図書館が休館し、情報へのアクセス経路が断たれたことがきっかけとなり、文化庁が著作権の制度改正に動いている。（①入手困難資料へのアクセス容易化、②図書館資料の送信サービスの実施）こうした動きと連動し、郷土資料を優先的にデジタル化し、保存と利用のバランスを取っていききたいと考えている。

「2. 空間・場」については、実空間である図書館の1～3階の各フロアと、情報空間にある「信州 ナレッジスクエア」を核として、それぞれの強みを生かしつつ、融合させながら、知的活動が展開される「場」を進化させるというものである。県立図書館の役割として、第一線のサービスを行う市町村の下支え、ということがありうる。このため、県立図書館は直接サービスを行わない、という選択肢も考え方としてはあるが、ここに書いたように、図書館というフィールドを「新しい出会いと発見が促される場」と捉え、実験・実践を通じて新たなプログラムを考えるためにも、実際に児童図書室、一般図書室を運用していきたい。

「3. 人」については、「これからの公共図書館研究会」によって、市町村図書館で共有している課題をともに解決することを通じて、職員が成長することを目指している。ここでいう「人」とは、図書館のスタッフだけではない。図書館における「知る・学ぶ」リソースは、資料・情報だけではなく、図書館に集い、関わり合いを持つすべての「人」もリソースだという考えのもと、あらゆる年代、あらゆる立場の人と人、人と情報とが出会い、活用され、発展する場を継続的に企画・実施したいと考えている。

#### (6) コロナ対策下のサービス方針について

資料により中村次長及び朝倉主査から説明

#### (7) 委員との主な質疑応答

質 疑	応 答
・ 困難な時期にこれだけの予算が確保できたと思うが、教育委員会に2点注文したい。 図書費はそもそも5年前の改革プラ	

ンにおいて、5,000万円まで回復することを目標として認められ、事業として進めてきたが、どんな状況でもその目標を大切に予算の確保に努めてほしい。経常的な経費の中だけでは難しいので、新しい財源を見つけるため地方創生とかコロナ対応等に迅速に対応してほしい。

人員のことでは、正規司書が減っている。中途採用や配置転換により図書館事業の経営者たる人材を獲得することが喫緊の課題である。これも教育委員会に十分動いてほしい。

書庫棟の改修工事は6年前からのテーマであるが、単なる倉庫管理のための改修ではなく、資料の再組織化ともリンクさせて、将来の資料の活用や運用に供するための改修と考えて企画をしてほしい。

リポジトリについては、県のデジタル公文書館の動きときっちりリンクさせ、図書館がその一翼を担えるよう調整をしてほしい（平賀委員）。

昨年のクリスマスに刊行された「100分で名著」のマルクスの「資本論」の本に、長野県の図書館のことが出ている。全国の図書館の中で非常勤の職員が増えているという文脈の中で、長野県ではほぼ8割が非常勤で全国で一番多い。予算には限りがあり、やらなければいけないことも沢山あり、資料も揃えなければならぬと制約は多々あることは理解した上で、働く条件とか働き方をもっと改革していけるようなチャレンジを県立図書館が率先してやってほしい（西山委員）。

・この4年くらい長野県の館長会議の主要課題に人材をいかに獲得して育てていくかということがメインとして出ている。そういう意味で、県立図書館だけではなく、長野県全体の問題であるので、博物館も含めて県立図書館が方向性を示しながら一緒に議論していく、あるいは人材を共有していくしくみを何とか作りたいたいと思ってきた。是非その方向で、高校の司書もうまく取りまとめて、大事にしてほしい（平賀委員）。

・長野県の場合、学芸員の状況は、もしかしたら図書館よりもっとひどい状況

西山委員から事前にお知らせいただき、読んでみたが、この本の文脈は、社会の共有財として図書館はとても大切なものであるという認識のもと、例えばそれを測る指標として職員の立場が全国的にどうなのかという統計を出したときに長野県は臨時的な雇用形態の割合が最も多いという結果が出ているという状況である。非正規問題は図書館に限ったことではないが、短期間の不安定な雇用であることから、人材育成や、モチベーションの維持などが困難になるという課題があると思っている。今年度からは会計年度任用職員の制度が始まるなど、流れができていく中で、現実的にできることを考えている（森館長）。

今のお話は、「信州知の連携フォーラム」の枠組みで一緒にやっていかなければならないこと

<p>かもしれない。長野県はもともと博物館がどこよりも多くあるが、正規の職員は限りなく少ない。博物館もかなり危機的状況である。県立歴史館の形態はかなり異なっているが、博物館も含めた文化施設も併せて長野県で考えてほしい（渡邊会長）。</p>	<p>だと思ふ。先ほど平賀委員から4つめにご指摘いただいた「長野県リポジトリ」のところは、県のデジタル公文書のあり方や、行政文書も含めた役割分担、人員をどう確保するか、専門性ということについて、フォーラムの枠組みで横の関係性の中で考えていけるとよいと思ふ。</p> <p>書庫の改修に伴う資料の再組織化については、このあとの「ミッション・ビジョン」のところでも詳しく議論させていただきたい（森館長）。</p>
<p>・電子ブックは、実際に始めるのか（平賀委員）。</p> <p>・無いものは目にしないと、手にしないと分からないものである。だから、試行することが、とても大事だと思ふ。将来どうなるかある意味分からない部分を抱えながら、とりあえず、とにかくやるのが大事である。図書館が資料費をデジタルにシフトするという覚悟を持っている以上、この計画は始めるべきだと思ふ。是非、教育長を説得できるとよいと思ふ。</p> <p>今後、読書バリアフリー法の基本計画を策定することになるだろうが、その中に当然描かれるべきものだと思ふ。そこも併せて、図書館がやれるべきことは沢山あるはずで、今持っているデジタルな情報提供の枠組みの中で、数万冊に及ぶ青空文庫を提供することはすぐにでもできることである。それで形にして見せて、その有効性を訴えることも図書館が努力してほしい（平賀委員）。</p> <p>・今期、こういうものであるということが見せられて、それを実際に使うシーンが目に見えるようになれば、次年度は導入しようとなるのではないかと期待している（平賀委員）。</p>	<p>・始めたい。なかなかゴーサインが出ないが、方向性は認めていただいている。</p> <p>資料費の目標5,000万円というのがあるが、今は3,300万円位である。そのうちの1割位を電子ブックに充てて、毎年コンテンツを増やし、5年後位のスパンで絵を描きたい。</p> <p>紙の本でも、選書対象になるようなものの出版点数に左右されるので、図書館員的には、これから出版される未来のことで完成形を示せと言われても困るというところで留まっている。そこを突破しないといけない。難しくてもエビデンスを示しながら、目指す方向性やロードマップは描こうとしている（森館長）。</p> <p>・予算を伴わずに、青空文庫のところはやりたい（森館長）。</p>

・棟田館長、春日館長、「電子書籍貸出サービス」に関するアンケートを実施したところ、自由記述欄に色々なご意見をいただきました。やはり、温度差がかなりあるのは確かだが、一館一館が苦勞するというよりは、県全体と一緒に課題解決していければよいなという感じが見えてきた。(森館長)。

・バリューブックスが、先日、古本買取サービスから本を読む人の支援サービスを目指しますと企業としてのミッションを変更された。図書館と一緒にやれそうだと思うので、是非、西山委員よろしくお願ひしたい(平賀委員)。

・個人的には諸手を上げて賛成だが、温度差はある。行政の中での温度差もあれば、図書館同士、広域の中でも温度差はある。高森町のようにトップの鶴の一声で始められるところもあれば、県立図書館のように丁寧に積み重ねてやろうとするところもある。やはり、一足飛びにはできないと思う。

青空文庫については、今、広域でやろうとしているシステムの統合のところに青空文庫の何かを組み込めないかと思い、これから相談していきたいと思った(棟田委員)。

・本が循環するようなサービスを提供する会社になりたい。本が好きな人にとってより便利だと思ってもらえるようなことを、サービスとして具体化したいと思い、2月1日からまずは買取サービスの方向性を切り替えた。是非、一緒にやらせていただけたらと思っている(西山委員)。

・電子ブックについては、私は非常に興味はあるし、これからのことを考えると良いと思うが、図書館の職員の中にある紙信仰を強く感じる。やはり本でないとは駄目、そういう感覚が強いと思う。

今の時代、電子ブックは当たり前だが、先ほど棟田委員が言ったように丁寧な説明とか体験、講習といった具体的なものを通して良さを感じてもらっていくのが第一だと思う。人間は分からないものには、まず反対するのが普通である。

ただ、駒ヶ根の場合には、全世代型(図書館)という感じを押し出したいということがあり、その中で電子ブックは非常に有効な手になるのかなと思う。しかし、電子ブックそのものはバリアフリー化というものを持っているが、アクセスについては、格差が問われてくる可能性が強いということもあり、そこを考えていく必要がある。

後は予算である。駒ヶ根の場合は予算が非常に厳しいので、市教育委員会との交渉の中で、縮小しないために連携をしていこう、つまり、図書館業務を今まで全部10を引き受けていたところを4くらいにして、その他の部分については連携をしていこうというところが出てきている。そういうことの一つのきっかけになると思う。

もう一つ言うと、駒ヶ根の場合、図鑑を使った調べる学習をやっている。今年度から小学校から高校、それから大人も入れたが、良い成績が出た。今までは夏休みの宿題的なもので調べる学習が出てきていたが、そうではなくて、ど

	<p>のシーズンでも、自分が調べたいものを調べてまとめて発表して、もう1回調べてテーマを決めてという循環ができる、そういうものの一つの手立てに電子ブックがなるのではないかと考えている（春日委員）。</p>
<p>・この流れで、是非、高校の教育現場と子供にとっての電子ブックについて、コメントをお願いしたい（森館長）。</p> <p>・内山委員、先ほどの説明の中で、多読の話が出ていたが、その点での活用が考えられるかということと、信州学のテキストを電子書籍化して、県立長野図書館のサイトで公開しているが、そういったものもあることを実際に高校でどのくらいの人が知っているか、ご存知ですか（平賀委員）。</p>	<p>・私自身は、図書館に紙の本が並んでいるといいなと思う人間だった。最初、電子ブックの資料を見たときに、少し「え？」となったが、読んでいるうちにアクセスという点で、図書館がない市町村とか、予算が不足しているところにも届くのが電子ブックだとよく分かった。</p> <p>ただ、春日委員が言われたとおり、コンテンツのアクセスはできるが、読むための端末、Wi-Fi とかがないところが心配である。今、高校の総合的な探究の時間が始まり、調べ学習をしたり、コロナのことで休校になり、家庭でのオンライン学習もあつたりしたが、やはり問題になるのは、Wi-Fi の環境とか、タブレット、スマホ、パソコンがあるかということが話題になっていたのも、そういったハードの部分、それぞれの方が読めそうだが読めないということは何とかなければならないと思う。</p> <p>しかし、方向性としては、こういったことを取り入れていくと、今まで考えられなかった可能性が開けてくるとお話を聞きながら感じた（内山委員）。</p> <p>・信州学のテキストについては、信州学の本は知っていたが、電子書籍化されたものについては、知らなかった。</p> <p>多読については、自分は英語の担当であるが、これまで勤務した学校で取り入れている。今、本を買うのが高くて、どこから予算を持ってくるかが問題なので、もし、電子ブックという形でできれば、すごくありがたいと思う。今は本で買っても資料で使える担当がいなくなると、そのまま死蔵されているので、電子上で死蔵されることなく、どこからでもアクセスできれば、非常によいと思う（内山委員）。</p> <p>・多読本を学びの場で使うメリットは、多分80の高校に1セットずつ、計80セット置かなくても、複数セットを使いまわすことができるという点で、電子ブックの特徴が活かせる分野ではないか。これから、具体的にどのように使えるのか、ご相談しながら、進めていければよいと思うので、よろしくをお願いしたい（森館長）。</p> <p>・是非、お願いする（平賀委員）。</p>

・子供にとって電子ブックは如何でしょうか（森館長）。

・家には小学校2年生の子供がいて、子供新聞を購読している。先日、他県の電子ブックについて載っていて「長野県はないね。」と話していたが、まだ家には読むための機械がない、タブレットがないので、「何で読むのかな。」となった。今度、学校で1人1台タブレットを準備するという話を聞いたので、学校でタブレットで読むという習慣ができてくると、図書館に行かない子も本を読むきっかけになるのかなと思う（松山委員）。

・おっしゃるとおりだと思います。デジタルトランスフォーメーションだという掛け声だとか、コロナでということで、ハードの整備は進むと思うが、それをどう使うか、何に使うのかということは、皆で知恵を寄せ合って、より有効に協力し合って、できることが沢山あると思う。問題は、そのことを担当している人たちとの間にまだ対話が成立していない、声がなかなか届かないということである。

デジタルトランスフォーメーションを推進している課の議事録を先日ネットで見つけたが、やはり、「取り残される人」が出てくるだろうから、そこをちゃんとフォローしなければならないという意見があった。デバイスを持っていない人とか、使いこなせないとか、そういう人がいることが分かっている行政サービスのDX化は進めていくことになるだろう。部署や分野を越えて連携し、フォローしなければならないのではないかな。

春日委員が言われたとおり、かえって情報格差が起きる恐れは同じことだと思う。一緒になって講習会を主催するとか、そのときに興味をもってもらえそうな電子ブックをネタとして活用するといったことで手を結んでいけたら理想かなと思う（森館長）。

・GIGAスクールは、子供にとって格差を埋めるチャンスである。学習塾をタブレットでやっている子たちが沢山いる。その子たちが手にしているタブレットで何ができるかという、ドリルをやるだけではなく、そこに図書館が入っていて、本が読み放題である。つまり、毎月7,000円を払える家の子たちは、図書館にフリーで自分の端末からアクセスしている。

今、これから1人1台家にも持って帰れるかどうかは学校次第であるが、持って帰れる状況になったときに、それでアクセスできる場所として図書館があることが、格差を埋めていくという点でと

<p>でも大事なことである。是非、やらなければいけないことである。</p> <p>高校はいわゆるデジタル化が一番遅れているが、教育委員会の中で高校のデジタル化の話がどんどん進んでいると思うが、こういったコンテンツやソフトや教育の質の仕方の話の中に、是非この話を一緒にしてほしい。文化財・生涯学習課は、高校教育課とこの話をしてほしいと切に希望する（平賀委員）。</p> <p>・教育次長と館長が、そういう夢をきちんといつも語り合えるようになるとよいと思う（平賀委員）。</p>	<p>・あと一歩だろうと思って頑張りたい。今日、沢山いただいたご意見が、後押しになると思う（森館長）。</p>
<p>・使命（ミッション）、展望（ビジョン）、行動指針（バリュー）、行動計画（アクションプラン）の4層の構造は良いと思う。行動計画の2と3のところだが、これをやった結果、利用者にとどのようになってほしいか。これをやることにより、こうなるというイメージがあるとよいと思う。前回もお話ししたが、これをどう評価していくか、継続していくかということがあるとよい（西山委員）。</p> <p>・今の、西山委員の話はよく分かる。「で、どうなるの。」という話で、実はそれが、ミッションである。2年半前からの宿題が言葉として議論できる形になったのは、とても素晴らしいと思うし、森館長のイニシアチブで司書の皆さんと議論したことが垣間見られ、非常によいと思う。</p> <p>ただ、今の西山委員の話であるが、この行動指針、それが実はミッション、社会的意義である。実はこのビジョンと書いてある展望の下線部分を除いたところが、社会的な意義・効用である。</p> <p>ミッション、ビジョン、バリューがどうなければいけないということはなくて、企業を見ればそれぞれであり、形式にこだわるわけではないが、このミッションの部分は、実はフィロソフィーと呼ばれるものである。哲学、理念と言われる普遍的なもので、例えば、日本国憲法が日本の法規の普遍的なものであるということと同じである。どこの図書館であれ、どこの国であれ、民主主義の社会においては普遍的な哲学だと思う。だから、私がこれにタイトルをつけるとすれば、ミッションではなくフィロソフィー</p>	<p>・言われていることは、よく分かる。実は、並行して松本市立図書館のあり方検討委員会に関わってきた。人によって、こうした言葉で表すものの中身は、それぞれの考え方がある。ただ、一番上位に書いたものが、「民主主義国であれば、どこでも同じはず」という意味では、確かにフィロソフィーだというのは腑に落ちた。</p> <p>今回の案は図書館の立場から書いたものなので、世の中に発信するときには、もっと世の中の人たちからの視点を大切に分かりやすくした形で出していく必要があると思う。</p> <p>その際、図書館が県民の皆さんへの約束ごととして出すときには、「情報格差をなくします。」とか、「次世代に継承します。」といった、端的に言葉を出すことになると思う。</p> <p>それを県民の側から見れば、「現在もその先も、失われることなく、等しく情報を得ることができるんだな」ということが伝わるものにする必要があると思う（森館長）。</p>

とする。次の、展望、ビジョンと言っている部分は、実はミッションである。で、下線部分が実はビジョンに当たる部分で、これをもう少し行動計画との間くらいの言葉に置き直してビジョンと書くとうっきりすると思う。

どのような資料・情報の基盤を強化するのか、どのような分野のものをどのようにしてということ、空間についても、それは誰のために、誰がやるのか、人的な体制についても、誰が現場をするのかという話を切り出して、それをビジョンとすべきである。ビジョンというのは、「こうありたい。」「私たちはこうしたい。」という図書館側からの願望、姿、イメージである。

この下線部分を除いた部分は、ある意味、「社会がこうなってほしい」というミッションである。順番的にも、行動指針、バリューは、実はビジョンよりも上のものである。というのは、バリューとミッションはもっとロングスパンのものである。15年、20年、四半世紀というスパンで見ると見るものである。ビジョンは、もしかしたら5年とかで見直されるものである。

ここの整理をすると、ミッションとして西山委員が懸念されていたような「私たちにとってどうなのか。」と読んだ人たちのイメージが出てきやすいと同時に、そこから「県立長野図書館は何をするのか、したいのか。」ということ切り出す。行動計画と今書かれているビジョンの間くらいのベクトルを持った言葉を出したらよいのかなと思う。

例えば、資料なら、先ほど行動計画の中で「長野県に関する資料」という話があったが、それをもう少し噛み砕いて、何を揃えるのか、あるいは、収集するものは何で、収集しないものを獲得するにはどういう方策を取るのか、というようなことがビジョンになると思う（平賀委員）。

・それは、西山委員が言う私たちの暮らしがどう変わるかをイメージしてもらう部分だと思う。私たちが約束をする、私たちが社会的に何をするかというのは、それを実現するために我々がどこへ向かうかという自分たちのありたい姿に対する願望という言葉になると思う。

この構成自体はとてもよいと思うの

<p>で、そこをうまく分けると、読む人にとっても、市民にとっても、行動する皆さんにとってもより明確になる（平賀委員）。</p>	
<p>・他の皆さんのご意見をお聞きしたい（森館長）。</p>	<p>・信州大学は2年前に「信州大学 VIDION2030」といって 2030 年の大学のビジョンを作ろうとしていて、その教育の分野で作業をしたことがあるが、例えば、人と書いてあって、重点事項として説明が沢山出ているが、大学で作成したときはもっと具体的な行動指針、図書館のサービス計画とはどういうサービス計画で、どのようなことをするのかということを皆で勝手に言い合っていく部分が初めにある。学校支援もそう。この上の空間の場の3階はよいとして、1階、2階のプログラムはどのようなもので、どのようにして動かすのかということは、多分前提としてあると思うが、そういうものは具体的にこういう感じ、あんな感じということをして沢山出した上で汲み上げないと、こんなイメージになるのだなということに今結びついていないと思う。</p> <p>単純に言えば、実際にこんなことをやる、あんなことをやるという具体的な例が並んでいると繋がると思うが、ある意味でそれをまとめた、割と一般的な言葉が並んでいるので、県民にすればイメージがつきにくくなっていると思う。だから、その下に具体的にこういうことをやると一度書いてみた方がよいと思う（渡邊会長）。</p> <p>・アクションプランは、そういうものである。ビジョンのところがうまく分化していない。実は、2年半前から「議論してね。」と預けたのは、そのアクションプランとビジョンを両方行ったり来たりしながら、言葉にしている自分たちが本当にできるものの言葉にすることである。その議論をしていると思うが、それがきちんと仕分けできていない。</p> <p>行動計画というものが、ビジョンに基づき、だからさらにこれが大事という重点的なものが並んでいるのが、きっと分かりやすい（平賀委員）。</p> <p>・一般化しているので、具体的なイメージがすぐに分からなくて、きっとそうなのだろうけど、どうなるのだろうということである（渡邊会長）。</p> <p>・何か、例えば、というような事例を、出しましょうか。ものすごく沢山あるが（森館長）。</p> <p>・行動計画としては、ここに抽出したものが何</p>

であるのかということと何のためかということが分かればよいと思う。ただ、何を目指し、何をしようとしているかというビジョンの部分がかうまく抽出されていない（平賀委員）。

・例えば、先ほど事例として、書庫の改修をきっかけにという話の流れの中で、行ったり来たりをしながら説明をした。書庫の本を貸し出すかどうかという一つの経営判断をするには、この層のこの部分に書いてあることを具体化すると、こういうことになりますということ具体化することになる。皆と一緒にこの1年近く毎週のように議論する中で、「今話しているのは、ミッション、ビジョンに書いてあるこの事項に関わることだね。」といった会話が、日常的に出来るようになり、まず、我々が動きやすくなってきていると思う。

もちろん、具体的にやるべきことはたくさんあるが、ここにどこまで具体例を盛り込むのかには迷いがある。単年度の事業計画や、もう少しスパンの長いサービス計画みたいのが、やはり別途必要になるのではないかと思う（森館長）。

・具体例としては、こういうレベルでよいと思う。その方向性、例えば、具体的な話に入るが、資料に関して、「地域資料は貸出しできません。」と言われたが、「なぜ。」と言ったときに、本来的にはビジョンに鑑みると、「これはこうでなければならない。」けれども、「こうだからできません。」と言えるようなビジョンでなければならない（平賀委員）。

・それを目指している（森館長）。

・それが分からない。私が6年前の最初に整理したときに、皆に宿題として出したが、「一体この図書館は何を集めてきたのか。」「そして、今、皆さんは何を集めているのか。」、その答えが、ここには何も書いてない。一体この図書館はどういう資料を集めているのか、集めてきたのか、その意味は何か、それが資料に対するビジョンの中になければならない。

だからこそ、それがもしコアとして地域資料がこの図書館にとってもっとも大事ならば、それをいかに県民に対して、国民に対して提供できるようにするかということが使命である。それに向かってどう行動するのかということが、ビジョンに入っていなければならない。

しかし、「貸せません。」「保存が大事である。」と言っている。それは、どういうことなのか（平賀委員）。

・理解できる。しかし、その後、それを打破すると説明している（森館長）。

・資料に関して言えば、出版資料に関しては、こうです。でも、そうではなくて、デジタル資料でこうします。その主体に関しても、ナレッジスクエアの話で言えば、我々が単に収集するのではなく、県民が創造するのだということに大事にしたはずである。コモンズになると言ってきたはずである。そういうことが、ビジョンの部分である。だから、こうなのだけれど、今はこれができないということである（平賀委員）。

・今の資料の話であるが、保存というのは、はっきり言えば、それ自体は県民の財産として守るということである。それは、その機能で完結してよいと思う。それで、そこにある情報自体を多くの県民には一方で渡さなければいけないので、それはデジタルで、これから構築するナレッジスクエアで、全県民に情報をきちんとどこまでも届けるようにする、それで十分ではないか（渡邊会長）。

・今の話は、全部、レベルのところの整理が足りていないことがよく分かった。このミッション、ビジョン、行動計画の重点事項の蔵書の構築・配置計画の見直しのところで、書いていることの中身である（森館長）。

・中身を規定する大きな方向性もはっきりしていないし、では、中身はといえば、書いていない。ここの部分だけで言えば、どっちつかずである（平賀委員）。

・今の展望の①に「信州に関わるすべての情報」というようなことを書き加えれば、「すべての人々が等しく情報を入手できる。」や、「次世代に継承する。」という言葉で表現されていることと関連させれば、ここまでの議論を説明する形になるのではないか（森館長）。

・今、ビジョンになっている部分、私が「ミッションでしょ。」と言ったところだが、その下線部分を除いたところを、もう少し具体的に、ビジョンはこのミッションに向けて、どういうメディアで何をするのか、例えば、信州に関わるすべての出版情報は、収集し保存するということは、皆異論がない。

では、それだけかと言えそうではない。メインはどういう種類の情報を集めようとしてい

るのか。それで網羅できないものは、どういう形でアクセスできるようにしているのか。信州の郷土の資料に関しても、単に本を保存するだけではない。どのようにして見られるようにするのか、どのようにして提供できるようにするのか、というようなことがビジョンに入っていないと一個一個の行動計画が決まらない（平賀委員）。

・言われていることは分かるが、例えば、郷土資料をそこまで突出させると、他のことも全部そのレベルで語るのかということになると思う。ボリューム感としては裏表2枚位に収まるくらいのものを作ることをイメージしている（森館長）。

・そこが、この図書館は何を集めているのかということである（平賀委員）。

・資料に関しては、利用と保存のバランスを取るためにデジタルを使うというところでベクトルを組み合わせると説明できる構成を取っている（森館長）。

・eLibraryにせよ、デジタルにせよ、出版物にせよ、この図書館は長野市立図書館の半分以下の予算しか持っていない、国立国会図書館の10分の1に満たない量の本しか持っていない、一体それは何なのか、何を集めているのかということがないと、eLibraryであれ、出版物であれ、この図書館が何かということが分からない（平賀委員）。

・「長野県関係のものは全部集めます。」というレベルの言葉が必要ということか（森館長）。

・そのような図書館ならそこをきちんと抽出して書くべきであるし、それ以外の情報に関してはどういうスタンスで提供しているのか、すべてではないのなら、何なのか。紙で選んでいるのなら、どういう視点で紙を選んでいるのか。

一般の人たちからすれば、この図書館も、長野市立図書館も一緒なのである。長野市の人、同じ目的で両方に来る。しかし、長野県民の90数%の人には来ない。本当は、ここへ来なければならぬ理由がないといけない。それをはっきりとこれまで百十年間、外に向かって言っていないのがこの図書館である。だから、長野市立図書館若里分館と言われる。

例えば、児童サービスもよく分からない書き方をしているが、20いくつの分室を持っている長野市立図書館がある中で、そのあたかも一つ

	<p>のようにしてここが児童書の直接サービスをしている理由はあるのか。そのことを十分議論したのか（平賀委員）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それは、他の事項にも関わってくると思う。今日の最後の議題である図書館のチャンネルを開け続けるという趣旨に基づくコロナ禍においてどのようなサービスを続けようとしているのかというところとも関わる（森館長）。</li> <li>・ビジョンに何か方向性が描かれていれば、「だから、やっているのだね。」とか、東京都立図書館のように「だから、借りられないのだ。」ということになる。今の段階では、それが分からない（平賀委員）。</li> <li>・どんな資料を集めるかについては、選書基準が別途ある。「ミッション・ビジョン」は、かなり整理して普遍的な言葉で語りながら、日常的な業務や事業計画を上げる際の指針になるものを作りたい。そのことと今ご意見としていただいたものを、もう一回すり合わせたい（森館長）。</li> <li>・そこははっきり考えないと、今までのように長野市立図書館の方が便利だという話がまかり通る。それでは、県立図書館のある意味がない（平賀委員）。</li> <li>・県立図書館のある意味については、館内でかなり議論を進めてきている。ただ、表現されていないと言われたら、そうなのかもしれない（森館長）。</li> <li>・そこが、ある意味、今までと違う議論がされているとよいと思う。例えば、保存と言うが、この図書館、郷土資料に関しては2冊、ものによっては3冊確保されている。保存するのであれば、1冊だけ保存させていけばよいではないか。後の2冊は、自由にアクセスできてよいではないか（平賀委員）。</li> <li>・自由にアクセスさせた結果、紛失したり、破損したり・・・（森館長）。</li> <li>・それは、もう1冊が保存されている（平賀委員）。</li> <li>・その保存したものを、利用に供さざるを得なくなる（森館長）。</li> <li>・だから、それはもう、古書で獲得すればよい（平賀委員）。</li> </ul>
--	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そのことは、かなり議論をした上で、今このままで貸出し対象にはできないという判断をしている（森館長）。</li> <li>・それがいつまで、という話である（平賀委員）。</li> <li>・デジタル化を組み合わせ、別の手段が出来るまでである（森館長）。</li> <li>・そういう議論が、十分なされているのであればよい（平賀委員）。</li> <li>・そこはかなり行なった。ただ、表現されていないということが、よく分かった（森館長）。</li> </ul>
<p>・私は大学ではこういう感じで作るので、ビジョンの部分は分かりやすいと思う。このビジョンを作ったところで、ここに6年の中期目標、中期計画をビジョンに沿って入れていくわけである。だから、中期目標、中期計画をイメージすると、これだと、ビジョンの下でこういうことをやるというのは分かるが、何を目標にして、どこまでやるということ自体は、まだ分かりにくい感じはする。</p> <p>ビジョンに沿った行動であることは分かるが、目標であり計画であるとすれば、もう少し具体的に形が出てこないといけないと思う（渡邊会長）。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それは、サービス計画として作りたいと思う（森館長）。</li> <li>・ただ、例えば、デジタルにするまでということは今ここで聞いたが、これから次の5か年というスパンで考えたときに、いくつも選択肢はある。なにも本をデジタル化しなくても、デジタルセキュリティ I C タグを全部つけてもよい。失くしたくないのであれば。それだって、選択肢になる。</li> <li>それが、この5年の間に何を指して、どこまでできるだろうかという話、それが、中期的な計画、事業計画、サービス計画であればよいが、この行動計画がこれから5年間とかいうスパンで書かれているとすれば、それがどこまでいくのか、いつまでにということが明確になればよい（平賀委員）。</li> <li>・1年1年の事業計画とかサービス計画が必要だと思う。前回の議論でも、スパンを100年スパン、30年スパン、5年スパンと言ったときに、30年後にできているということではなく、30年間位はこういう考え方でいくが、できることを、できるタイミングでやっていくというものであるとご説明した。</li> <li>先ほどのデジタル化の話も、全てデジタル化が完了するまで郷土資料は貸し出さないということを言っているわけではない。郷土資料を貸し出す決心をするためには、「貸し出す場合には必ずスキャンをする」とか、「意識改革」や「スキルアップ」、もっと言えば、「上向きスキャナを買う」とか、そういうことができれば、貸出しをしてもよいというルールが作れるだろう。</li> <li>それを計画していくということである（森館長）。</li> </ul>

	<p>・それがビジョンである。ビジョンは長くても20年である。</p> <p>ミッションは、もう少し長いかもしれない。だから、要するに、デジタルを使うということがもし大事ならば、やはり、ビジョンの中に織り込まれていなければならないと思う（平賀館長）。</p>
<p>・今、資料のところ、デジタル化の話をしているが、空間も場も人も全部に関わるので、こういう三つとプラスデジタルという構成にしたが、一つ一つに対してそれをどう関わらせるかを書いた方がよいということか（森館長）。</p>	<p>・今、言ったのは、特に資料・情報に関してであるが、空間・場に関しては、県立図書館の役割は2つある。この館の中の事業をやることと、長野県の図書館行政、図書館政策を考え、浸透させていくということ、今まで市町村支援と言っていたが、ここと文化財・生涯学習課の重要な役割である。</p> <p>では、空間・場というのは、人の話に関して言えば、長野県の図書館の皆さんと議論しながら、図書館のあり方に関して先進的な何かを目指していく場であるという話でよいのではないかと思う。デジタル云々の話は、空間・場に関しては、特に必要ないのではないか（平賀委員）。</p> <p>・空間・場に関してもデジタルが関わってくるところがあると思う（森館長）。</p> <p>・この図書館をどう作るか、それはここだけの話ではなく、長野県の図書館、皆で議論しながら、これからデジタル、体験を含めた融合した空間を目指すということがビジョンに書いてあってもおかしくはない（平賀委員）。</p> <p>・それは入れてあると思う（森館長）。</p> <p>・そんな感じでデジタル云々ということが、ビジョンの中に入ってきてよいと思う。人の話についてもそうである。</p> <p>DXで、つまり、デジタルで県民の一人一人の能力を拡張させていく、それが幸せであるという話が入っていてもよいと思う（平賀委員）。</p> <p>・情報リテラシーという言葉を使わずに何とか表現したかったが、eLibrary計画について、図書館の機能のデジタル化と学びのネットワーク化という2つの柱を立てて、学びのネットワーク化の方に情報リテラシーというキーワードを入れた。</p> <p>これは、資料・情報の提供の仕方をデジタルシフトしていくにあたって対になるものなので、人の能力開発という、あまり上から目線のような言葉を使いたくないが、そのような要素は必要だと思う（森館長）。</p>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・だから、ある意味、道具立ての方からの言葉になるが、eLibrary計画は、言われるとおり、この全体をそう呼ばばよいと思う（平賀委員）。</li><li>・そこは常に迷っているところで、道具立ての話だけをすると、それだけのように見えるので、組み合わせで使いたいと思う（森館長）。</li><li>・先ほど、DXは人を幸せにする、人の能力を拡張する話であると言われた。それが上に載っている分には、皆違和感はない（平賀委員）。</li><li>・これからの5年という意味で言えば、まさにそれが柱であるので、逆に、組み合わせではなく、前に出しても構わない気はする。もうこれから5年は、これが一番の力になって変えていくのだから（渡邊会長）。</li><li>・多分、恐らく5年とかではなく、もっと長いスパンでもそれを掲げてよいと思う（平賀委員）。</li><li>・あちこちに皆掛かるのですという、非常に煩雑になって、逆に見えにくくなるような気がする、うたってよいと思う（渡邊会長）。</li><li>・ビジョンをこの3つに分けるのはよいが、その前段階として、これからは私たちは情報の形にこだわらず、デジタルなものが人の能力を拡張するというに着目すると言ってよいと思う（平賀委員）。</li><li>・多分、そうした方が分かりやすい（渡邊会長）。</li><li>・色々な困難を私たちはそれで乗り越える、皆さんの幸せのために、皆さんの能力を拡張させるために最大限活用する、そういう基盤を整えるということにより（平賀委員）。</li><li>・社会はそう動くと言っているから、別に特別な話でもない（渡邊会長）。</li><li>・実は、この30年そう言い続けてきている（平賀委員）。</li><li>・図書館の部分で、欧米は動いたが、日本は動かなかった（渡邊会長）。</li><li>・今の議論に基づき、図書館DXについては目的も含めて明記するようにする（森館長）。</li></ul>
--	--

・委員の皆さんからもご意見をいただきたい。うちのスタッフは、この数か月かなり悩みながらも、考えて言葉にしてきた（森館長）。

・最初の頃の他人の言葉を借りてきたミッション・ビジョンとは格段の違いなので、素晴らしいと思う。だけど、もう一押しである。皆これが本当に自分の言葉になっているのか。言葉にすること以上に、皆さんが対話することが大事だと思って始めたことである。

もちろん、出来上がりは大事だが、行動計画を含め、皆がこれを自分の言葉として議論できているかどうか（平賀委員）。

・今までの経過が分からなくてついていけない部分もかなりあったが、お話を聞きながら、県立図書館とは一体何かということを感じた。私は南信に住んでいることもあるが、行動計画の2番の空間・場になった瞬間に、建物としても県立図書館自体が遠くへ行ってしまった感じがした。それ以外の部分は、「できそうだな。そのとおりだな。」と思った。

確かに、県立図書館もそうであるし、そこで働いている皆さんが色々な思いを込めて作ったものだから、それは当たり前だと思う。しかし、先ほど平賀委員が言われたとおり、ある意味一つしかない県立図書館なので、長野県全体の図書館を引っ張っていくとか、長野県の中で図書館はどういうものかということを読み取っていく使命のようなところもあるのかなと感じた。

だから、こういう立場で「でん」といくのか、建物としての長野市にある図書館というところを中心にして考えていくのは当たり前であるが、できれば、長野県に一つしかない県立図書館であるし、具体的に図書館が何をどのようにやっていくかは、館長が言われたようなサービス計画や行動計画というところでやっていただくとして、全体としての使命として言うのであれば、長野県の図書館なのだということでもまとめた方がよいと思う（内山委員）。

・上下関係はないと思っている。ただ、県に一つということ、横並びの部分だけでは役割を果たしていると言えないというのは、そのとおりである。それを「下支え」という言葉や、行動指針で示している。

実際はどうであるか。春日委員や棟田委員、県立図書館がどうであれば、我々は動きやすい、こうあってほしいということはあるか（森館長）。

・今の議論をお聞きし、非常に勉強になった。

実は、駒ヶ根市立図書館でも、今、コンセプト作りを提案して進めようとしている。他の館がどうなのかは分からないが、右肩上がり蔵

書数や予算が増えていた時代には考える必要はなかったかもしれないが、こういう飽和状態になって、頭打ちの中で、私たちはどう工夫していけばよいかとなったときに、そもそも駒ヶ根市立図書館は何をすところ、何のためにあるのかというところを、もう一回問い直さざるえない部分があると思う。

県立図書館も多分そういうことだと思う。古い考えで言うと、県立図書館がモデルを作って、他のところがミニ県立図書館になっていくという考えもあると思うが、今のところはそういうことではないと思う。

私の個人的意見になると思うが、県立図書館が是非担ってほしいことは、そういう時代的な必要感、そういうものの共有がほしい。そうではないと、正直、今までどおり、読み聞かせしてきたから、読み聞かせだけをしていけばよいというところに落ち着いていかない必要感、ある意味変えていかなければならない。そうしないと、この図書館自体がメルカリやそういうものに全部飲み込まれてしまうという危機感、そういうものを共有してもらえると、動きやすいと思う。

こういう形で、先ほど平賀委員も言われていたが、こういうものを出して議論していく中に、その過程としてすごく良いものがある。私も市教育委員会に説明するときそのようにした。

「コンセプトなんて要らない。」と言われたが、コンセプトを作るという必要感を持って皆で図書館の意味を問い直していくことが図書館を非常に強くしていくし、長く続けられるし、これだけ厳しい予算の中で市民にとっての存在感を増すことになるのではないかということで、今、少しずつ進めようとしているが、正直抵抗は大きい。「必要感はない。」という人が多い。

そういう意味では、こういうことを一つ一つ議論していくことが大事であるが、もう少し言えば、こういうものをもっと発信して、今、県立図書館はこういうことで悩んでいる、皆で知恵を出し合っってこういうものを作っている、皆さんの図書館はどうですか、というところが出てくると、必要感を持って進めていく上での一つのきっかけになると感じた（春日委員）。

・この「共知共創の場」としてのところですが、私たち市町村立図書館の現場にいる者は、少し置いて行かれている感があった。私は長いし、この協議会にも入れていただいて何年も経ち、こういう議論を聞かせていただいて、県立図書館の皆さんが目指すところが分からないまでもない。

しかし、市立はともかくも、町村立図書館で

働いている者は、県立図書館でやろうとしていることに、まだ付いていけないのが現実かなという気がする。それが良いとか悪いとかではなく、この「挑戦します」というところに、一文「市町村図書館等の取組を下支えするとともに」と、何かさらっと流されているようである。

では、本当は「何をしてほしい。」と思っはいけないが、一緒にやっていかなければいけないが、実際に現場でやっっている者からすると、県立図書館の皆さんに支えてほしい。それが少し具体的に見えてこない。

これは、市町村立図書館向けの言葉ではなく、県立図書館の立ち位置なので、これはこれでよいと思う。私たちは現場でカウンターで本を貸し、読み聞かせをやり、学校支援をしてという現場の仕事をしていく中で、では、県立図書館はどういうスタンスで何をやっていくか。この文章の中から、市町村立図書館のためにやっっていくべきものが、少し見えない（棟田委員）。

・今日ご欠席の大林委員から事前にいただいたコメントを、記憶している範囲でお伝えする。電子ブックについて主にご意見をいただいている。

「今、小諸市立図書館に実際に来ている利用者の状況を見ていて、関心の度合いも、自分のデバイスを持っているかという意味でも、なかなか難しそうである。

だけれども、これからは、そのようなメディアも使って、図書館サービスを展開していくことに対してとても前向きに一緒にやっていきたい。

それを展開するとき、電子ブックだけではないが、すぐ隣にいるはずの教育委員会との関係性、なかなか関心を持ってもらえない。学校現場との連携も、いくつかとはできているが、全体としてまだまだこれからで、なかなか思うとおりに進まない。それでも、こうやって電子ブックという一つのことを一緒にやろうと声を掛けてくれたことが、とても嬉しい。」と書いてくれていた。

電子ブックに限らず、色々な他のことを含めて同じことが言えるのかもしれない。先ほど、春日委員が言われたとおりに、県立図書館も悩んでいるというような情報発信は必要かもしれない。実は、県内公共図書館のメーリングリストを立ち上げ、一生懸命投げかけているつもりだが、響いてくださる方もいてとても嬉しいが、多くがそのまま吸い込まれていくような手応えのなさみたいなものを、時々感じてしまう。

一方で、職員の皆は、それぞれの立ち位置で、

	<p>すごく響いてくれると感じる。そこは、平賀前館長が改革をされてきたところで、常に考え続けるとか、言葉に表現する努力をしてくれる。でも、そうであればあるほど、市町村の皆さんとのギャップも出てきてしまっているところもあるかもしれないと感じる（森館長）。</p>
<p>・松山委員、折角ですから、ご意見ありますか（渡邊会長）。</p> <p>・職員の皆さんは、如何ですか（渡邊会長）。</p>	<p>・私は、正直、県立図書館はあまり利用していない。県立図書館より市立図書館の方が、子供を連れて行くには使いやすい。長野市に住んでおり、どちらも近いが、どちらに行くか、違いが普通の人にはあまり知らない。こういう話をされていることを初めて知った。どのようなものが多くあるとか、どういうところを目指しているかをもっと発信して行って、子育てしている人も選んで行けるようになるとよいと思う（松山委員）。</p> <p>・私は2年間県教育委員会に行っていて、今年戻ってきた。今、司書会議をかなりやっていて、その運営が私の仕事になっている。そこで、今までこの話をずっとしてきた。</p> <p>最初に、森館長からも話があったが、戻ってきたときに感じたのは、これについてきちんと何か話すときに、必ず、「それはミッション・ビジョンと考えたときにどうなるのか。」というのを枕詞にして、だからこうしたいという話を皆がするようになったなと思っている。</p> <p>だから、結果的にこれがどのようにまとまるのがよいのかは、今は分からないが、前にいたときに比べ、そのようなことを普通に話せるような感覚になってきているだろうし、その結果がうまくまとまっていないかもしれないが、まとめていけるような形にはなっていると思う。</p> <p>ただ、先ほど棟田委員や春日委員が言われたとおり、市町村との関係性みたいな部分も含めて、私自身も長野市の人間ではないので、例えば、松本市に住んでいる私の父に県立図書館の話をして、「何の役に立つのか。」と言われる。</p> <p>それは、私自身が実感していることなので、市町村の皆さんとも一緒に話ができていけるように、今の司書会議みたいなことが市町村の人たちとやっていると、もっと違ってくるのかなと思っている。</p> <p>そういう意味では、「これからの公共図書館研究会」がここにも入っているが、そういうところが、県立図書館がやっているからなんとなく参加するのではなく、本音で言い合えるような関係性が作れていけたら嬉しいと思った（篠田主査）。</p> <p>・私は、郷土資料を扱う仕事をメインにしてい</p>

る。レファレンスという作業をしていく中で、やはり先人たちがしっかり残していったものを基に、今の皆さんの要望に応えるレファレンスをしているので、言わば巨人の肩に立つという感じで作業をしている。それは、先人たちがそのときそのときの長野県を残すという努力をしてきてくれたから、今それができるのだと思うし、また、どうしてこれを買っておいてくれなかったのか、どうしてこの本がないのかと今も思っている。今もネットの古書店を見て、発注をかけても、実際には手に入らないというケースがある。「日本の古本屋」には載っているが、もう出てしまったとうことで、運よく出物がないと絶対手に入らないというのを痛いほど感じている。

なので、きちんと残しながら、でもそれがちゃんと活用できるという形を作っていくことが最終目標だと思っているので、デジタル化というところになんとか行きついたらと思っている。

国立国会図書館でデジタルコレクションをやってくれているが、長野県の今出ている資料について手が回ってくるのはもっともずっと後だと思う。

しかし、今の出版事情から言うと、本がすぐ割れてしまうような簡易な作りになっているのが実際のところなので、そこも考え合わせて、やはり紛失していかないように何かの手立てを考えながら、使えるようにするにはどうしたらよいかというところが、いつももどかしい思っていて、これが、ミッション・ビジョンに繋がっていくことだと思っている。

丁度、渡りに船で、コロナの中で、私たちが絶版資料というか、流通しなくなった資料をデジタル化する理由付けを何とか手に入れることができそうな雰囲気が出てきているので、ここはそこを押ししていきたいと思っている。

それが、結局は、活用してもらえ図書館の基盤を作っていくことに繋がるのかなと思う。そんなところが、県立図書館のあるべきところだと私は考えながら、仕事をしたいと思っている（柳沢主幹）。

・私は、今年から資料の受入や整理をするところから、それを受け入れて整理したものを使うというレファレンスをするようになって、何のために私たちはこれを整えてきたのか、整えているのかということを実感する毎日である。

聞いてきた人や、カウンターに来てくれた人が、「知ることができた。良かった。」と思って、何か一つ得て帰ってくれるのが、私のやりがいである。それを一人でも多く、そうした感じを

	<p>味わっていただけるようにするには、どうしたらよいかということが、私のこれからの考える方向性である（畔上主事）。</p> <p>・30年後に現役でいる恐らく唯一の職員である。この先につながる「ミッション・ビジョン」を出していきたい（森館長）。</p>
--	---

#### （8）委員からの意見や要望

・先ほど、春日委員と棟田委員が言われた市町村立図書館とどう共にあるかという話だが、すごく大事だと思う。いわゆる「信州発これからの図書館フォーラム」とか研究会とかでも、そこに「さあ、いらっしやい。」と言ってもなかなか皆さん参加できる状況ではないというのが、現実だと思う。そういう中で、春日館長とか棟田館長とか一部の図書館の人たちとは、割と密な関係ができた。それを乗り越えるためにどうするかという議論もしてきたが、それぞれのブロックの中核館みたいなものと密にして、その中で対話を促進するお手伝いをする必要があると思う。そのためにも、春日館長や棟田館長のような人を見つけに行くことがすごく大事だと思う。

例えば、今度大桑村に新しい図書館ができるが、非常に心配しているのは、何らアドバイスをする人がいない状況で、今、開館に向かって進んでいる。そういうときに、常にコンタクトして、伺って一緒に考えるというようなことが、多分一番大事なことかなと思う。なので、こういう環境下であるが、図書館の人という意味では、そういう環境を一個でも多く増やし、頑張してほしい。

このように、ひとり県立図書館のこのみならず、県全体の学校図書館や公共図書館等と共に議論し、考え、これからの情報や学びや公共のあり方を県教委各部局や市町村も含め、共に推進することが必要である。そうしたあり方は、ビジョンとしても明示されるべき重要な点である（平賀委員）。

#### （9）その他

・次回の協議会は、新年度に入り、6月頃「令和3年度の事業計画」等をご審議いただく予定である。

会長及び委員の皆様には今後2年間お世話になるが、よろしくお願ひしたい。

#### 6 その他

・会議終了後、「信州・学び創造ラボ」で委員と職員との懇談を行った。